

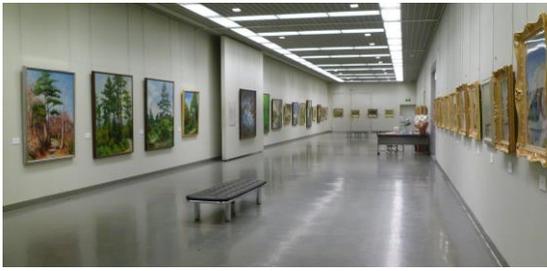
作家近況

念願の個展

神内 颯

油彩画を始めて二十余年、念願の個展を開催することが出来ました。会期は一月二八日～五日間、会場は福井県立美術館第二展示室です。

県内各地の同好の先輩や友人、元職場の仲間たち、近隣地域の親しい方々など、多くの人たちの力強い応援をいただき、なんと会期中千二百余名という、多くの方々のご来場をいただき、大盛況のうちに終えることが出来ました。とりわけ新日美京都支部の方々には遠方にも拘らず寒い雪の中をご来場いただき、大変嬉しく、また心強く感謝の気持ちでいっぱいです。また今年百七歳になられる私の師「豊田三郎先生」からいただいた、激励の揮毫「祝初陣」の色紙は早速額装、思い出に残る記念品として大切に保管しております。



森や山林・溪流などを描いた風景画、花器に花・果物などの静物画など、大小合わせて五四点を展示、山あり清流あり巨木ありの多彩多様な作品に大変好評をいただきました。特に荒波の絵、強い巨木の絵、また建築物をモチーフにした、細密的な絵には多くの

注目を集め、共感と好評の言葉をいただき、何よりの励みになりました。個展は作家が日ごろの活動成果を公開して、ご批評をいただく大切な機会です。油彩タブロー年間百枚の制作と、各種公募展やコンクールなどへの挑戦を続けて美的感性を磨き、そして次への個展開催に、そなえていきたいと考えています。



積極果敢に、あらゆるチャンスを捉えて、日々怠ることなく頑張つてまいります。今後ともご支援ご協力いただきますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

三人展始末記

埼玉西支部 千木良宣言

川越市のギャラリーR+において、高・高木・千木良の三人で開催の、「2015北のさいはてを描く・三人展」が、お陰様で無事終了しました。この展覧会は支部恒例の夏期スケッチ旅行で、昨年の八月利尻・礼文島を取材、制作したのを展示したもので、売上金の10%を支部に納入するきまりです。会場を三分割し、展示の場所はジャンケンで決めて、三人三様の展示をしました。



オープニングパーティには、山下利隆新日美審査委員長、川越市美術協会のK会長などの画人が出席され、また絵画ばかりでなく、O武蔵野ペン代表をはじめ文筆家や、詩人のO氏、女流詩人Mさんなど、芸芸

関係の方々も多数おいで下さって、さながら街の文化人の交流会、といった感じになりました。展覧会ではいろいろお話ができ、わが人生で終盤にさしかかった今が、一番エキサイティングだとの思いを新たにしました。作家の森村誠一さんが、「人生は生きることであり、そこに居るだけでは生存しているのみで、生きていけるか、生きていられないか、反社会的でないかぎり、なにかをやる」ということは、生きていて社会に参加していることである。」と書いていますが、全く同感です。



私を生きる絵と仲間、限りない感謝です。よい人生とは、生きては時間の長さではなく、感動の深さや、回数だと思えます。ご来場の方々とのお話でもそのことが話題になり、ある年配の男性からふと、「あんた佳

い顔をしているね」と、思いがけないことを言われました。「顔は履歴書」といいます、傘寿にして「佳い顔」とは、ずうっと大貧乏を引きずっての人生でしたが、「こりゃあ実は、大層幸運な人生ではないか」と思った次第です。とまあそこまではいいのですが、肝心の売り上げは、三人で支部に納入できたのが六百円という、誠におソマツな次第でした。

自由投稿

初心

宮嶋ふみ子

昨年の彼岸に、私と夫は実家の墓参にと帰郷した。(共に長野県出身で一度で済むため便利) 夫の実家の座敷に私が過去に描いた一枚の絵が飾られていた。懐かしさとあまりにも今とは違う作品に目を疑った。「竹ザルの上に数枚の笹の葉に乗ったタラバガニと徳利」。すかさず夫曰く「このころの絵画俺は好きだ。誰が見たってかにを肴に酒が旨そうだと」。茹で上がったばかりの蟹の色がそのまま、籠の目の細かさがモチーフをよく見て丁寧に実写している。その頃から今日迄、聴いたり、見たり、読んだり七転八倒し路頭に迷った子猫のようにさ迷っている自分。少しの進歩もない。

こんな時は初心(原点)に戻って一から始めようと、人を頼らず乗り越えることが自信に繋がるのではと。そして一、二、三月講座に通う事にした。まさに七十の手習いである。今さらと思いでしょが実践してみてもよし悪しはあとで考えようと、そして少しでも前に進もうと決心した。

夫婦間でもいろいろの面で「内助の功」という言葉がある。夫は私の絵に関して自身現役だったころの仕事(電気技術者)上ブラス、マイナスどちらかを間違えれば大事が発生すると物理的に見る。要するに黒か白しかない世界。性格も仕事上そんな感じで私の絵の工程上、彩りや形を見た目と違うのを「絵空事」を好まない。旅をした風景と違うと苦言をいう。これでは「巧」にならない。しかし本音を言ってくるのは身内だけで多少は耳に入れ参考にする。

以前にピカソ伝を読んだ折、掲載されていた絵は定規を当てて描いたような緻密な作品だった。晩年の絵は一体心の変化なのか、進化なのかたどり着いた集大成なのか、基本がしっかりできていたからこそ興味深く又怪奇に、楽しく、想像し心が豊かになる絵に変化したのだろうか。

今年には邪念を捨て初心(基本)に戻り一からと。それからどう変化させ、納得のいく作品が出来ればと、又決して「完成」は無いにしても少しでも近づければよしとして……。